

切込湖

切込湖は、奥日光北端の山奥にある 2 つ隠された山岳湖のうち小さい方です。幅が最も広いところで約 300 メートル、水深は深いところでは 15 メートルに達します。どちらの湖も穏やかなエメラルド色の湖水とそれを取り囲む太古の森で知られています。これらの湖は細い水路で繋がっており、数千年前に三岳（1,945m）の火山噴火で噴出した溶岩流が、谷からの水流を堰き止めたことにより形成されました。地表には湖から流れ出ている河川や水路が確認されていないため、湖水は地下の水路を通して流出していると考えられています。周辺地域には、手つかずの森林、火山岩の露頭、多種多様なコケが木々や岩、さらにはハイキングコースの道にも生育しています。

湖名の由来にまつわる伝説によると、日光の社寺を創建した仏僧、勝道上人（735–817）は、湖のそばに棲む大蛇が周辺の住民を怯えさせていると耳にしました。上人はその怪物を斬り倒し、その亡骸を湖の水中に葬りました。この英雄的な行為を称え、2 つの湖はその名前をつけられました。切込湖の「切」は切る、「込」は押し込むという意味です。

これらの湖へは、三岳の周囲を巡る曲がりくねったハイキングコースを通じて、湯元温泉と光徳温泉という 2 つの温泉リゾートを結んでアクセスできます。切込湖は、光徳温泉側の起点から約 2 時間半のハイキングで最初に見えてくる湖です。